

黒ノリ色落ち緊急対策事業Ⅱ

黒ノリ養殖支援

岩出将英・高崎有美子

目的

本県の黒ノリ養殖業では、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が求められている。

本事業では、漁期中にノリ漁場栄養塩調査及びプランクトン調査を実施し、その結果を迅速に生産者へ発信するとともに、その後の対応策等についての情報を提供することで黒ノリ養殖生産の安定化を図ることを目的とする。

方法

1 今漁期の気象の特徴について

気温、降水量は、津地方気象台が発表した津市のデータをを用いた。

2 今漁期の海況の特徴について

水温は鈴鹿市白子港(午前10時)の定時観測データ、栄養塩および植物プランクトン発生量は三重県ノリ漁場栄養塩調査のデータを用いた。

3 共販結果について

三重県漁業協同組合連合会発表の令和5年度共販結果データを用いた。

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中において生産者から送付、持ち込みされたノリ網や葉状体サンプルについて病害診断等の養殖管理にかかる指導支援を実施した。

結果及び考察

1 今漁期の気象の特徴について

図1に今漁期(令和5年10月から令和6年3月)と平年(平成3年から令和2年までの過去30年平均)の気象(気温・降水量)の動向を示した。気温は、11月中旬と3月上旬に低い傾向にあったが、概ね平年並みからかなり高めで推移した。降水量は、養殖期の序盤にあたる11月下旬から12月上旬にかけて非常に少なかった。年明けは、1月上旬に少なかったものの、その後は断続的な降雨があり、概ね平年並みからかなり多めで推移した。

2 今漁期の海況の特徴について

今漁期の水温(図2)及びDIN量と珪藻プランクトン密度(図3)の推移を示した。水温は、年内では11月中旬にかけて平年並みから高め、12月は平年より低めから高めの変動を繰り返しながら推移した。年明け以降は3月にかけて概ね平年より高めで推移したが、3月以降は一転して低めで推移した。

DIN量は、珪藻プランクトン密度の増減と概ね逆の変動を示した。本養殖期が開始された11月中旬以降では、珪藻プランクトンが比較的少なかった11月中旬及び2月下旬にはDIN量は多い傾向であったが、その他の期間は少なめで推移した。珪藻プランクトンの優占種は、漁期を通じてスケルトネマ属とキートケロス属だった。

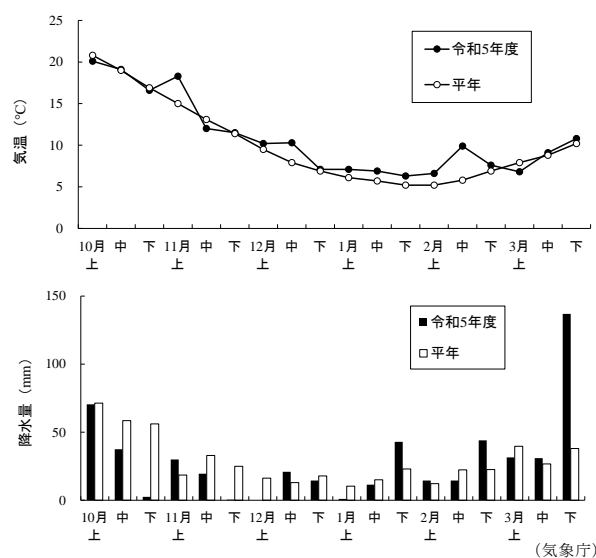


図1. 今漁期の気象動向(上:気温,下:降水量)

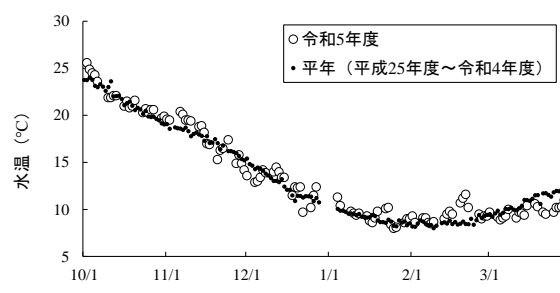


図2. 今漁期の水温動向

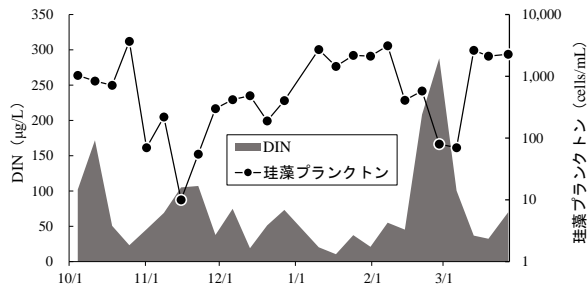


図 3. 今漁期の DIN 量と珪藻プランクトン発生量の推移

3 共販結果について

令和 5 年度漁期の生産枚数は 1 億 2,350 万枚（前年度比 98%）、生産金額は 23 億 7,080 万円（前年度比 105%）であった。平均単価（枚）は、19.2 円（前年度比 107%）であった。

共販汐回別の生産枚数と平均単価について図 4 に示した。単価は、主要生産県の不作により 2 回汐（令和 5 年 1 月 12 日）から 8 回汐（同 4 月 5 日）にかけて高騰した。

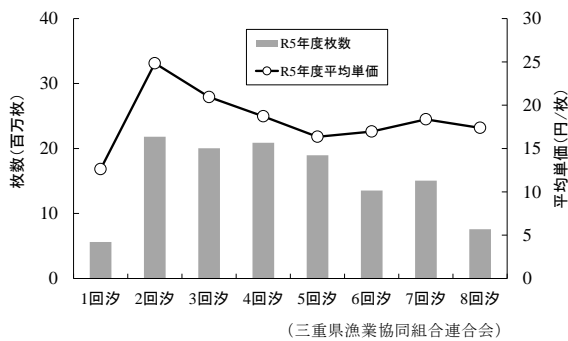


図 4. 汐回別生産枚数と単価の推移

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中に県内漁場の栄養塩動向調査及びプランクトン発生調査を合計 25 回実施し、生産者及び関係部署あて情報提供を行った。また、生産者の要望によりノリ芽検診及び病害診断を随時実施し養殖管理にかかる指導支援を実施した。ノリ病障害については、育苗開始から 10 日前後を目安に実施されたノリ芽検診において、ノリ芽が極端な細葉に生長する現象が多くの漁場で確認された。この現象は、ノリ芽が一定期間、高水温や極端な低栄養に曝された時に発生する細胞分裂異常によるものと考えられた。その後の生長不良が危惧されたが、11 月上旬のまとまった降雨による栄養塩量の回復と、水温低下によって 11 月中旬ごろからは正常分裂への移行が確認された。また、11 月上旬に南勢地区の一部の漁場で疑似しろぐされ症の発生が確認された。本症の特徴は細胞の肥大化や葉状体の壊死で、病勢は強く、ごく短期間で育苗中の養殖網からノリ芽が流失し、5 割以上の養殖網が生産不能に陥るといった被害となった。